近代文学における中国と日本

伊藤虎丸
祖父江昭二編
丸山昇

日文 701534823

伊藤虎丸
祖父江昭二編
丸山昇

近代文学における中国と日本

共同研究・日中文学交流史

汲古書院

近代文学における中国と日本
——共同研究・日中文学関係史——
昭和六十一年（一九八六）十月二十日発行
定価一〇、〇〇〇円
編者　伊藤虎丸　祖父江昭二　丸山昇
発行者　坂本健彦
整版　中台整版
印刷　多田印刷
発行所　汲古書院
一〇二　東京都千代田区飯田橋二—五—四
電話〇三（二六五）九七六四　振替東京五—一五八〇三五
©一九八六

近代文学における中国と日本／目次

まえがき　伊藤虎丸　1
近代文学における中国と日本——序説に代えて——　伊藤虎丸　15
黄遵憲と日本　佐藤保　55
「摩羅詩力説」の構成——魯迅に於ける救亡の詩——　北岡正子　77
正岡子規と魯迅、周作人　木山英雄　127
「満韓ところ〴〵」について——漱石におけるアジアの問題——　伊豆利彦　151
「草枕」と「故郷」——楽園喪失をめぐって——　米田利昭　181
（付録）「坊っちゃん」と「阿Q正伝」
郁達夫と大正文学
——日本文学との関係より見たる郁達夫の思想＝方法について——　伊藤虎丸　207
創造社と日本——若き日の田漢とその時代——
付、田漢年譜稿・及び資料目録　小谷一郎　313
日中の架橋——世界語者たちのひそかな作業——　高杉一郎　371
日本における魯迅　丸山昇　411
「上海」論——初出と初版本との比較を中心に——　祖父江昭二　459

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

魯迅・モラエス・白鳥・野口――日中文学交流（一九三五）点描――　釜屋　修　499

「満州児童文学」について　新村　徹　529

藤枝丈夫と大高巌について　佐治俊彦　553

座談会・佐藤春夫と中国　585
祖父江昭二・伊藤虎丸・高杉一郎・小野忍・丸山昇・佐藤保・尾上兼英・沢谷昭次・佐治俊彦

あとがき　佐治俊彦　627

まえがき

本書の成立の基礎となったのは、一九七〇年代から八〇年代初めにかけての、ほぼ一〇年近い間継続した、私たち中国近代文学研究者と、日本近代文学研究者との共同の研究会であった。この「総合研究」の具体的な経過やそこから生まれた本書の内容や意図については、後に、「序説に代えて」と題して記すこととし、ここでは、この研究会が続けられた一〇年間という時代の日中関係についての、私個人の雑駁な感想を書かせていただくことで、「まえがき」としたい。

と言うのが、この一〇年間は、今ではもう誰の目にも明らかになった劇的な中国政府の政策転換と日中関係の「正常化」とが次第に進行すると共に、戦後以来の日本人の中国像が大きく揺らぎ始めた時期と、ちょうど重なっていたのである。

七二年の田中角栄による国交正常化は、確かに私たちが長らく願って来たことの実現ではあったが、同時に私などがかつて漠然と願って来たようなものではなかった。むしろ皮肉にも（と私などには思えるのだが）、私たちが願って来た日中国交回復は、戦後以来の私たちが中国革命に抱いて来たイメージに決定的な転換を迫るような形で実現した。七六年、毛沢東の死後、「プロ文革」の失敗が誰の眼にも明らかになり、そのなかで、私たちが予想していた以上の様々な非人間的な事態が起っていたことが暴露され、またしても「後れた中国」というイメージが拡がるのと並行して、「国交」は拡大していった。とりわけ「文革」の失敗と中国政府の劇的な政策変更は、少なくともかなりの人々には、中国＝社会主義の失敗、日本＝資本主義の成功という構図として受けとられ、それがまた日本国内での革

新思想の無力化にはねかえるという形で事態は進行してきた。

このような事態に対する受けとめ方は私たちの中でもさまざまで、研究会の席上で正面から対立することさえ稀ではなかった。いずれにせよ〝中国像の再構築〟という作業は、（本書もそのための一歩でありたいと願うのだが）、私たちにとって、〝日本像〟の再検討と切り離し得ず、それはなおこれからの課題だと言うしかない。

中国像の再構築をめぐって

いったい、〝中国像の再構築〟という場合、ことを中国近現代文学研究に限っていえば、私たちが踏まえておかなければならない歴史として、今日の新しい事態を迎えるまでに、二、三の段階があったことが指摘できる。

第一に、一九三〇年代に発足した竹内好、武田泰淳、松枝茂夫らの「中国文学研究会」の人たちが、はじめて中国近代文学を〝世界文学〟の中で〝同時代の文学〟として見ようとした段階がある。

第二の段階として、戦後は、何よりも中国革命への共感、憧憬乃至は敬意が、中国文学への関心の出発点であった。

第三に、一九六〇年代の後半「プロ文革」が開始されて以後の一〇年間がある。この時期「文革」をめぐってそこに、西欧近代を超える人類的「実験」を見る者とそれを否定する者との間で意見は大きく分裂したが、いずれにしても、〝革命〟あるいは〝社会主義〟というものが中国への関心、中国像構築の核であったことは変らなかったという意味で、この戦後から七〇年代中頃までを含めて一つの段階とすることもできよう。

こうした中国近代文学研究史における二つ乃至三つの段階は、私たちの研究会メンバーの問題関心にも反映していて、時に、世代的にもかなりはっきりした見解の差異を生んだりもして来たが、いまこうした段階を経た上で、現在私たちが直面している「中国像の再構築」という課題との関わりから言えば、ここから、私たちが困難を感じている二つの問題を取り出すことができるだろう。

㈠　中国理解の軸をどこに求めるか、という問題――余りにも極端な単純化であることを承知の上で言えば、「中

国文学研究会」の世代は、同時代の〝文学〟という観点を軸に、戦後世代は〝革命〟あるいは〝社会主義〟という観点を軸にして、中国との間の相互理解の道を尋ねて来たが、今日、そのいずれもが困難に逢着している。

前者についていえば、戦前にはなお僅かながら存在した〝文学〟上の〝同時代性〟は、戦後には、ほとんど失われたままに推移して来ており（この点については、後に「序説」でも触れる）、今日では、日本の〝文学〟そのものの衰弱という状況が加わって、これを軸とする相互の理解乃至は対話を困難にしている。

後者についていえば、中国政府の急激な政策転換以後、「土工法、はだしの医者に集約」される「中国型社会主義」のイメージは「再編」を迫られ（たとえば松下圭一　一九七八・二・二七〈朝日新聞〉夕刊）、さらには、こうした中国社会主義の変貌とその背後にあった経済的困難とが明らかになってくると共に、それが日本における社会主義思想の後退に一層の拍車をかけ、資本主義から社会主義へというマルクス以来の発展段階説自体が、改めて問い直されている情況の中で、戦後以来の「革新思想」を軸とした中国との相互理解乃至は対話も、やはりある種の困難あるいは困惑の中にあるといえるだろう。

㈡　日本の近代と中国の近代とをどうとらえるかという問題――戦後に、侵略戦争を生んだ日本近代への反省の軸として竹内好が提起した中国像は、日本近代が西欧近代の「優等生」つまり「転向」型の擬似近代だったのに対して、中国近代は「回心」型の近代であり、こちらにこそむしろ「真の近代」があるという考え方を含んでいた。これはたとえば、丸山真男氏の「カッコ付きの近代を経験した日本と、それに成功しなかった中国とにおいて、大衆的地盤での近代化という点では、今日まさに逆の対比が生まれつつある」（『日本政治思想史研究』「あとがき」一九五二・一一）という言葉にも見られるように、単に竹内個人のみに止まらず知識人の中にかなり広く存在した、いわば〝戦後民主主義の中国像〟とでも呼ぶべきものであった（丸山昇の指摘による）。このような中国近代への視角は、その後、〝中国は西欧化は拒否したが独自の近代を生み出した〟という観点や、中国に〝ヨーロッパ近代を超えるもの〟を見

ようとするものから、さらには「文革」の中国に〝反近代〟の思想や「日本の高度成長政策の生み出した歪みに対するカウンター・ビジョン」（上掲松下氏）を見るものまで、いくつかのヴァリエーションをも生んで来た。

しかしながら、この一〇年間に私たちの眼に明らかになって来た中国の実状は、こうした、中国に「真の近代」「独自の近代」乃至は「近代を超えるもの」を見ようとする視点を動揺乃至は崩壊させるに十分だった。とりわけ「文革」の実態が明らかになるにつれて、「大衆的地盤での近代化という点で」、中国の現実が「近代を超える」ものであるというよりは、むしろ甚だしく前近代的なものを残していたことを、私たちは認識せざるを得なかった。

と同時に、そこで言われはじめた「中国像の再構築」が、実は単に〝近代化の後れた国〟という戦前のそれへの逆行（その〝繰返し〟）にすぎず、それにさらに（或いはたまたま）社会主義の失敗、資本主義の優位という、戦後とは逆方向の、しかしやはり一種の事大主義的な認識が重なったにすぎないものであるとしたら、それはまさしく、戦後に、侵略戦争とその敗北に帰結した明治以来の日本近代への反省として、竹内好が鋭く指摘したところの、前近代的な身分制意識を残存させたままの（西欧近代を、権威として、いち早く受けいれ得たのもそのためである）擬似近代という日本近代の体質は、今も少しも変ってはいなかった、という証拠になるのではないだろうか。――「日本の社会の矛盾がいつも外へふくれることで擬似的に解決されてきたように、日本文学は、自分の貧しさを、いつも外へ新しいものを求めることによってまぎらしてきた。自分が壁にぶつからないのを、自分の進歩のせいだと思っている。そして相手が壁にぶつかったのをみると、そこに自分の後進性を移入して、相手に後進性を認める。」（「魯迅と日本文学」一九四八）という指摘は、そのまま今日の〝新しい（？）中国像〟にも当てはまらないだろうか。――もし、こうした疑念がなにがしか当っており、日本人の中国像（それは経済繁栄の上にのって思い上った日本人の日本像と表裏一体のものだ）が戦前に逆もどりしてしまおうとしているとしたら、それは過去の歴史に照らして、日本自身の運命にとって、不吉な予兆をはらむものだろう。

＊　＊　＊

一九七〇年代から今日まで、私たちが当面して来た状況という時、そこには少なくとも、以上のような二つの問題（二つの困難）があっただろう。

とりわけ、竹内好の提起した問題をどう理解するかは、私たちの中で見解の対立が最も鮮明にあらわれた論点であった。いまそれについて詳論する余裕はないが、私個人としては、少なくとも次の点だけは言っておきたい。

第一に、中国にこそ「真の近代」をみるという視角は、敗戦を契機とする日本近代への反省として提起されたものであって、その点と切り離してこれを論ずることは無意味だろうということである。つまりそれは日本近代批判のための「批評装置」だったのであり、言いかえれば、まず第一に「方法としての」中国像だったということである。

第二に、かなり広範囲に存在した竹内への誤解がある。たとえば「竹内好の視角に象徴されるように……日本から見て中国は思想的先進国とみなされつづけて来た」（上掲松下圭一氏、傍点伊藤）といった竹内理解は、あるいはそのように「みなされつづけてきた」という事実は存在したにしても、上のような意味で、「日本近代の批評装置として、これほど包括的で、内的斉合の度合の高いものは、少いだろう」（加藤周一「竹内好の批評装置」）と言われた竹内の問題提起に対する、明らかな誤解を含んでいるだろうということである。つまり、竹内は、中国を「日本から見て」、たとえ「思想的」にも、決して「先進国」などとは見ていない。竹内の指摘の独自性とそれが私たちに与えた衝撃は、むしろ、「進歩的」だった日本近代から見て、中国近代が「保守的」だったことを（そのゆえに中国が陥った「悲惨」をも）見た上で、それを「先進国――後進国」という図式で見ること自体を、つまりそこにある日本近代の（身分制的、ドレイ的な）意識構造を批判したところにあった。竹内は、「保守」的な中国に、「自己を固執することで自己が変る」型を見、「進歩」的な日本に「自己を固執しないことで自己の変らない」型を見た。後者はつまり、「新しいものを次から次へとうけいれてゆくこと自身が、すでに伝統と化しているということだ。西洋に追いつき追

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

い抜こうとする明治維新以後の日本の近代化の『成功』の背景は、そういうものである。」（加藤周一同上）。戦後日本の高度成長の「『成功』の背景」も、そういうものではなかったのか。そして、以上のような竹内の「近代主義」批判を、「反近代」の思想と見るもう一つの見解が、皮相の見にすぎないことは、言うまでもなく明らかであろう。それを言うなら、「真の近代」の立場からの「擬似近代」批判だったと言うべきである。

第三に、むろん、竹内とは逆に、そういう「進歩」性こそが、日本に今日の繁栄をもたらした、世界に誇るべき日本人の特性だとする立場も成り立つ。むしろ現実にはその方が日本人の中の多数派であろう。〝日本人は卑屈で自虐的だ、日本人はもっと自分に誇りを持つべきだ〟といった民族感情をくすぐる議論がこれに加わる（そこで言われる〝誇り〟は、竹内が主張して止まなかった「民族の自立（主体性の確立）」とは逆方向のものだ。あたかも魯迅における〝民族〟と国粋派のそれとがそうだったように）。「ジャパン・アズ・ナンバーワン」という外国人の本の翻訳紹介のされ方などにはそれが感じられる。そういう立場に立てれば、確かに気は楽になる。しかし、簡単にそう出来ないのは、繰返し言ってきたように、竹内の問題提起が、「戦後の反省」の一環だったということがあるからだ。つまりそれは「戦争責任」論、乃至は日本人の「倫理」性の回復というモチーフと切り離せないものだった。

竹内は戦後の「戦争責任」論の中で、丸山真男氏や鶴見俊輔氏らが引いたヤスパースの『戦争の責罪』（橋本文夫訳、一九五一）に言う「四つの罪」（刑法上の罪、政治上の罪、道徳上の罪、形而上学的な罪）の概念区分に賛成し、「私は坊主主義の立場ですから、形而上学的責任を深く感ずる」（一九五六）と言った鶴見氏の立場に同調し、「罪は客観的に存在するが、責任は『責任意識』に主体化されなければ」ならぬとし、「戦争責任という曖昧な……範疇でとらえるのではなく、いきなり（中国に対する）侵略の罪という媒体を投入する」ことを主張している（「戦争責任について」一九六〇・二）。彼が日本人の「進歩」性の中に、民衆と知識人（それも進歩派と体制派を含む）に共通する「ドレイ性」を指摘したのは、「客観的に存在する」中国への「侵略の罪」の、刑法上、政治上、道徳上の問題の根底

にある「形而上学的な罪」に対する反省の一つの試みだった。そしてそれは、戦後の戦争責任論が、いわば中途半端なまま、やがて起って来た高度成長の波の中にのみこまれてしまった結果として、この四〇年の間に刑法上、政治上、乃至は道徳上の「罪」への反省は、確かにかなり定着したにしても、「形而上学的な罪」への反省は、中途半端なまま今日にまで持ち越されてしまったと見える以上、現在もなお、問題提起としての意味を失ってはいないであろう。

第四に、右の「形而上学的な罪」への反省として竹内が提起したのは「文化」の問題であったと言えるであろう。たとえば先に見た中国像再構築の要求には、戦後の「中国共産党の高い倫理性」、「人間革命としての中国革命」といった理想化された中国像は「虚像」に過ぎず、実際の中国は未だに重い封建性を引摺る後れた国であったといった幻滅感を含んでいるだろう。文革後の中国の小説に描かれた建国当時の回想などを見ても、それは決して虚像だったわけではないようだが、しかし、やはり一九五六、七年頃までの、革命の成功、新国家誕生の直後という高揚した時代の一面を反映したに止まるものだったことは否めない。私自身、一度の革命によって人間の一切が一挙に変貌し得る、またし得た、と幻想して来た自分の観念性を深く思い知らされてはいる。

だが、だからと言って、竹内の「問題提起」が既に無用になったとは、私には思えない。竹内の「虚像」を否定する「実像」が、つまりは「後れた、前近代的な中国」というだけのものなら、それが竹内を越えた「新しい」中国像とは、私には到底思えない。そもそも竹内の中国像は、そうした「後れた中国」という「実像」(?)が広く日本人一般の常識だった時代に、「それが後れとしか見えない」ことへの批判として提起されたものではなかったか。とすれば、それは、むしろ今日においてこそ改めて強く想起さるべきではないのか。

言いかえれば、竹内が問うた「近代」とは、あくまで「文化」即ち「精神」の問題であって、それが産み出した結果としての「モノ」(思想を含め)の問題ではなかった。彼はその立場から、日本近代には「文化がない」とさえ言

い切っている。彼は日本近代の「変る」ことの早さ（進歩性）の中に「精神」の欠如、つまり「変らない」もの（封建性）を見、中国の「変らない」こと（保守性）の中に確乎とした「文化」（彼のいう「精神に似たもの」に当るだろう）の「抵抗（＝自己固執）」を見て、そこに中国とヨーロッパとの文化的「対決」（丸山真男氏が「単なる反対ではない」と言ったもの）、即ち「真の近代化」の形相を見出した。そしてそれを見得ない日本人を「ドレイはドレイであることを意識しない時に最もドレイ的である」という言葉で批判した。――「竹内好の問題提起」と呼ばれたものの、戦後の進歩思想の中に首まで浸っていた私にとっての衝撃性は、まさにこの点、彼が中国近代の「後れ」そのものの中に「真の近代」を指摘した事にあった。

以上、竹内を代表とする「戦後民主主義の中国像」が再建を迫られていると言う時、それにもかかわらず私たちがそこから引き継がねばならぬ遺産は何か。

(1) 中国近代の「後れ」を問題にするなら、同時に、それでは日本には近代があるのかという問いを忘れてはならない。その時、私たちは、文化はモノではなく、人間は精神であるという立場に立つ限り、竹内が「文化がない」と言ったように、日本近代の文学や芸術や科学の中に、新しい文化と呼び得るものを見出すことに大きな困難を覚えるのではあるまいか。そして、そうした反省的立場に立つことによってはじめて、同じくヨーロッパの衝撃を受けてトータルな「文化＝様式」の転換を迫られ、新しい文化を産もうとして産み得ずにいるアジアの近代の苦悩と混乱という、いわば共通の相の下に、日・中の近代をとらえる視点が与えられるのではあるまいか。――「中国像の再構築」は「日本像の再構築」でもあると言った所以でもある。

(2) その上で、封建と近代という、いわば歴史的な普遍性の視点と、ヨーロッパと中国・日本という文化的な個別・特殊性の視点とを、手続きとして一応分けた上で、両者を統合する〝方法〟が見出されなければならない。――前

者は「生産力」の発展に還元される側面を持つだろうが、それが産み出す近代文化は民族をこえてすべて均質なものになるのか。竹内が言った固有文化への「自己固執」の結果は、「封建性の残存」とどう異なり、どう関連を持つのか。竹内が、自己固執を欠くために「新しいものが古くなる」だけの日本と対比させて、中国近代に見出した「古いものが古いままで新しくなる」という現象は、果してアジアが「ヨーロッパの普遍主義をこえる新しい普遍主義」を産み出す道につながるものなのか。もしそうなら、この現象は如何なる構造を持ち、それは、今日の「不透明」な時代の中で、私たちに如何なる態度を示唆するのか——。ここには、なお遺された問題があるであろう。

そして「態度」といえば、竹内が遺したものは、何よりまず日本近代の精神的貧困への反省の欠落、それと表裏をなす浮薄な先進国意識や、既に西欧近代をも超えたかのように思い上った錯覚が克服されぬ限り、アジア諸国民との間に真の友好と理解を作り出していく道は「方法的に」閉されているという問題ではないであろうか。——今日、日中の相互理解の軸をどこに求めるかを苦慮して来て、私は、多くの人とは逆に、結局、竹内の視点以外には、そこから出直すべき糸口を見出せないのである。

＊　＊　＊

この一〇年間に、「日中の新時代」は、私たちの予想をこえる速度で進行してきた。だが、友好や交流を説くことは易しくとも、真の友好は、確かな相互理解の上にしか築かれ得ないだろう。戦前・戦後のレベルを越える新しい相互理解の深化がない限り、〝歴史は繰返〟し、「新時代」は新時代でなくなるだろう。

私たちは、この一〇年間に明らかになって来た現実を冷静にみつめ、中国像の再検討が迫られていることを卒直に認めつつ、同時に〝新しく〟構築されようとしている中国像が、私たちの気付かないところで、実は、戦前のそれへの逆もどりになることを恐れる。再建さるべき中国像は、（竹内好の用語でいえば）過去の「繰返し」ではなく新しい「発展」でなければならない。

そのためには、果してどのような道があるだろうか。いま考えられる方向は、二つの問題（困難）と呼んだそのいずれについても、あくまで「戦後の反省」に固執しつつ、実証的研究の積み上げを通して、両国の「近代」の比較研究を、「文化」すなわち「人間」の問題へ深めかつ発展させることにしかないのではあるまいか。

私たちの力量の問題を抜きにして言っても、右のような方向が果して有効性を持つか否かということにも多くの議論があるだろう。ただ、上に見て来たところは、両国民の相互理解の軸をどこに求めるかという問題にせよ、「近代」乃至は「社会主義」とは何かという問題にせよ、今やそれを「文化」＝「人間」の問題に求め、そのレベルからとらえ直さない限り、もはや一歩も前に進めないところにきていることを示しているのではないかというのが、私たちの（と言うことが僭越だとすれば、少なくとも私個人の）思いである。そして、本書が、そうした意味で、中国像の再建の道を模索している人々に、多少の材料なりとも提供できたらというのが、編者としての、余り大きくない願いであると言っても、それは、それぞれに力のこもった各分担者の論文の、学術上の価値を貶しめることにはならないだろう。

共同研究のめざしたものと小野忍先生のこと

終りに、本書の書名と同じ研究題目を掲げて、前後三回にわたり文部省科学研究費助成を受けて続けられた、私たちの日本文学研究者と中国文学研究者との協力による総合研究のめざしたものと、こうした協力関係の中心だった故小野忍先生への、これまた私的な思いを述べて「まえがき」の結びとしたい。

上に書いた一〇年の時代についての感想は私個人のものにすぎず、共同研究者それぞれの見解はまたそれぞれであったにしても、またそうした時代的問題と各個の研究テーマが直接にかかわるか否かを問わず、私たちが共通して、自分たちの研究の営みの背後に、常に現代を意識しており、さらに、たとえ中国文学を研究対象としていても、どこかでそれを日本の問題として考えていた、と言うことはできるだろう。私たちが領域を異にする研究者との共同研究を企画したことは、このことと関わっている。つまり私たちは、「境界領域」の研究などといわれるものとはやや異な

る意味で、「総合研究」――学問の総合性の追求――が要請されていることを感じていた、といえよう。そしてその際、現代と日本という二つの観点から問題を出発させるということは、実は、私たちの総合研究が本拠を置いた、和光大学の人文学部文学科の理念とも無関係なことではなかった。――私は、このような学問の総合化（それは人間化と同義である）への志向も、戦後理念の一つだったと考えているのだが、これまた、この一〇年間に、急速に色褪せて来たように思われるのである。

このことと同時にもう一つ、私たちは、既に触れた中国近代文学研究の歴史の継承と反省の中で、実証的研究の必要を強く感じていたといえよう。実証作業の前提に明確な仮説が必要なことは言うまでもないが、その際に日本的な文学通念や社会通念を安易に持ちこむことの危険というだけではなく、細かな事実についても、一見些末にさえみえる実証を抜きにして迂闊に従来の事実認識に拠りかかることはできないことを私たちは感じていた。それは、たとえ些末に見えようとも、今は、そうした実証研究の辛棒強い積み上げの先にしか、「中国像の再構築」は期待し得ないという感覚であり、また、そうした実証研究によって、両国文学の背後にある諸条件と、両国の文学上、文化上、また社会上での差異を具体的、客観的に把握することを通して、はじめて、両国民の当面している人間的課題の共通性をさぐり当てることも可能になり、そこからはじめて温かい文学的、人間的共感も生まれ、真の友好の基礎もそこにこそはじめて見出されるのではないかといういわば、実証性が生む温かさとでもいうべきものへの感覚であった。

＊　＊　＊

このような、総合性と実証性への志向が、本書において、どの程度実現されているかは、読者の批判に俟つしかないことだが、研究計画の中では、各研究分担者の研究発表とそれをめぐる討議を通じて、またそれでカバーし切れない時代やテーマに関しては、中村忠行氏をはじめ何人かの正式メンバー以外の方たちの継続的な協力を得ることによって、通時的にも共時的にも諸領域の研究の相互連関性についての認識を深めることが出来た。実証研究の面でも、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com